

[33] 文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2556541>

出版情報 : 文學研究. 33, 1943-12-30. The Kyushu Literary Society
バージョン :
権利関係 :

彙報

九州帝國大學法文學部文學關係講義題目

昭和十八年學年第二學期（自四月至九月）

國語學 國文學

進藤誠一教授

佛文學講座擔任の進藤誠一助教授は五月十九日付を以つて教授に昇進。

佐藤通次 助教授

在任十七年本學部のために多大の貢獻をなされた佐藤先生には本年四月二十八日付を以つて國民精神文化研究所員に轉任。五月二十三日、二十四日辭任の挨拶のため來福された。

千代正一郎 講師

佐藤助教授轉任のため本學出身の福岡高等學校教授千代正一郎氏を五月七日付を以つて講師として迎へ獨語及獨語初歩を擔當して頂くことになつた。

萬鴻年 講師

六月七日より前河南大學教授萬鴻年氏の支那語、支那語初歩開講。

上代文學概論
萬葉集講讀

高木教授
高木教授

近世文學後景論

小島助教授

演習 近松淨瑠璃

小島助教授

國語音韻論

笹月講師

演習 源氏物語

笹月講師

支那語學 支那文學

楚辭

目加田教授

演習 六朝文藝論

目加田教授

周作人研究

松枝助教授

演習 水滸傳

松枝助教授

支那語學

松枝助教授

英語學 英文學

英語史

豊田教授

演習 Shakespeare's Plays

豊田教授

演習 Thackeray: "Henry Esmond"

豊田教授

中世英文學

中山助教授

講讀 十九世紀散文

中山助教授

演習 十七世紀英國悲劇

中山助教授

佛語學 佛文學

支那語初歩

萬 講師

十八世紀文學史

文學關係卒業論文題目

講演 Stendhal : Le Rouge et le Noir

進藤教授

——昭和十八年三月提出——

獨語學 獨文學

蕉門俳論より見たる芭蕉の文學

清川逸郎

浪漫主義序説・自然主義時代

演習 クライストの小説

小牧教授

演習 シュプランガー「ゲーテ論」

小牧教授

演習 Hobbel : Maria Magdalene

内藤講師

梵語學 梵文學

梵詩講讀

小野島助教授

梵語初歩

小野島助教授

西藏語上級

小野島助教授

言語學

言語學概論

吉町助教授

外國語

英語(カールライル講讀)

中山助教授

佛語初歩

永田講師

獨語初歩

永田講師

獨語初歩

千代講師

羅甸語初歩

千代講師

支那語初歩

小林講師

支那語初歩

萬 講師

九大國文學會

○國文學會萬葉旅行

高木教授・小島助教授引率の下に副手・學生一行十三名は左の日程により新緑の大和・吉野地方に見學旅行をなし五月中旬歸學す。

五月 八日 京都地方(御所・桂離宮拜觀)

同 九日 平城宮址より奈良市へ

同 十日 藤原京址、飛鳥地方一帯

同 十一日 生駒より龍田路へ

同 十二日 石上神宮・足痛地方より長谷寺へ

同 十三日 吉野地方(大瀧・宮瀧)解散

○國文學會例會

五月二十九日 夜、於三畏閣、高木教授以下教官・學生多數出席し和氣黨々裡に萬葉旅行の感想を語りあひ九時過ぎ散會。

九大支那學會

六月三日午後一時半より惠愛會館に於て萬鴻年氏歡迎會開催、

目加田教授・楠本教授・松枝助教授・日野助教授外學生八名出席。初めに萬氏の御挨拶があり松枝助教授が通譯の勞を取られた。専攻生森一作氏の今春二ヶ月餘に亘る大陸旅行の中、主として北京旅行につき報告などがあつて盛會であつた。

九大獨逸文學會

四月七日 佐藤助教授の送別會を午後五時半より大工町の八百重にて開催、出席者八名。

五月三十日 この九月定年にて御退官になられる小牧教授、同月卒業の學生宮城信男氏の送別の意味で、都府樓・觀世音寺方面へ遠足、午後五時半より二日市にて送別會開催、獨文關係出席者十名、頗る盛會であつた。

九州帝國大學獨逸文學會編の故片山正雄教授の遺文集「片山正雄遺文」が配本された。

片山正雄先生の遺文集を讀みて

千代 正 一郎

わが九大法文學部獨逸文學科初代教授として大正十四年八月より昭和七年四月まで獨語獨文學を講ぜられ、本學獨逸文學科創設のために洵に大なる功績を残された片山正雄先生の遺文集が「片山正雄遺文」と題して先般南江堂より刊行せられたことは、門下生の一人として喜びにたへない次第である。數年前小牧健夫、佐藤

通次兩先生の御提案により本書の刊行が計畫せられたとき、私もできるだけのお手傳をするつもりだつたのに、急に廣島の地に赴任することになつたので、結局當時福岡にをられた溝邊龍雄先輩（現臺北帝大豫科教授）に編輯の一切の仕事を頼むするやうな結果になつて本當に申譯なく思つてゐる。溝邊氏の御勞苦に對してはこの機會に心から御禮を申したいと思ふ。本書は先生が九大御在職當時發表せられた論文隨筆等を中心とし、更に既刊の單行本に収録漏れとなつた原稿をも併せて編纂せられたもので、先生のドイツ文學觀の集大成といつて差支ないであらう。卷頭には先生の師たりし登張竹風氏の「孤村と私」といふ序文が氏獨得のユーモアをもつて先生の人となりを描きだしてゐる。なほ孤村といふのは明治末期のわが文壇に活躍せられた先生の詩人としての雅號である。

昭和六年四月私が本學獨逸文學科に入學したときの片山先生の御講義は「寫實主義及び自然主義」といふ題目で、テキストとしてオスカー・ワルツェルの「ゲーテ死後現代に至るドイツ文學」を使用せられたが、中途にさしはさまれる解説を通して十分先生のドイツ文學觀を汲みとることができた。また演習にはゲーテの「ファウスト」第二部を講ぜられた。難解をもつて聞える第二部を先生に講義していただけたことは私としては生涯の幸福だつたと思つてゐる。しかし第二學期は病氣御静養のため講義を休まれることになり、結局そのまま翌昭和七年春には病氣を理由として御退職になつたので、私が先生の御講義を聞いたのは僅か一學

期にすぎなかつた。さうして一年後の昭和八年春、私は生れてはじめて上京し、久しぶりで先生にお目にかかることができたが、これがつひに最後の訪問となつてしまつた。その年の暮、卒業論文に苦しめられてゐた私は先生御逝去の悲しき報らせを聞かねばならなかつた。かやうに親しく先生に教へを乞ふすべを奪はれた現在において、先生の遺文集が刊行せられたことがわれわれ門下生にとつて、いかに大きな喜びであるかは筆紙につくしがたい。

先生が猛烈な勉強家で實に多くの書物を読んでをられたといふことはかねがね先輩からも聞いてゐたが、今度の遺文集を讀んでその背景となつてゐる該博なる知識にいまさらのやうに壓倒されてしまつた。本文の巻頭を飾つてゐる論文「文學科學概説」はかつて九州文學會の同人でもあられた先生が「文學研究」創刊號のために執筆せられたもので、いはゆる文學藝 (Literaturwissen-schaft) の詳細なる解説と批評である。これなどもドイツ文學の蘊奥をきはめられた先生にしてはじめて可能なる名論文であり、凡そ文學を研究せんと欲する者は必ずや本論文により啓發せらるる點が多いであらう。これは要するに文學研究の根本態度をあらゆる角度から論評せられたもので、いはば片山先生の「文學論」である。その意味において單にドイツ文學研究者のみならず一般に文學に興味を有する者にとつて必讀の文章たることを信じて疑はない。

先生の遺文集を讀んで私のしみじみ感じたのは自分の勉強の十分なことであつた。あるひはこれは私ひとりの感じかも知れない。

いが、一般に明治時代に教育をうけた學者にはドツシリと腰を落ちつけて勉強するといふ型の人が多かつたのではないかといふ氣持がする。學者としての漱石や鴎外はいふに及ばず、どんな方面にしてもあの頃の學者の書いたものを讀むと、よくもこんなに勉強したものだと思つて驚歎せざるをえない。反之、近頃の學者のうちにはややもすると功をせりすぎて腰が落ちつかず上調子になりやすい人がないでもない。その結果或る者は自己の見解を樹立するにのみ急で、見識を廣める餘裕に乏しく、偏狭なる獨斷論に陥つてしまふ。明治時代における熱狂的な西洋文化移入に對する反動としてかういふ傾向が起つて來るのは當然であるにしても、これも餘り極端に走ると偏狭なるひとりよがりになる恐れがある。本來の日本精神はもつと包容力に富む、おほらかなものであるはずである。

また他方において、特に外國文學研究者のなかには作品、ないし研究書の翻譯紹介といふ如き安易な道を選んで、自主的な研究を避ける人もあるやうである。しかし今こそ日本人としての自覺をもつて外國文學を研究し批判すべきときではないだらうか。翻譯の名人はゐても、獨自の見解と博い學識をもつ眞の學者に乏しいといふ現状は大いに反省を要するであらう。この意味においても片山先生の遺文集はドイツ文學研究者のみならず、一般に精神文化を研究せんとする者に多くの教訓を與へるに相違ない。(九州帝國大學獨逸文學會編「片山正雄遺文」南江堂刊、定價五圓)

受贈雜誌

心	ハ	書	工	基	英	日	國	文	中	民	國	國	土	國	長	山
の	、	業	業	督	語	本	語	國	國	間	民	語	佐	民	崎	口
花	キ	現	現	教	研	研	研	文	文	傳	神	國	史	評	商	
木	木	勢	勢	研	究	究	究	化	學	承	文	談	論	叢	學	
（竹柏會出版部）	（藤木の會）	（東京工業大學）	（東京工業大學）	（基督教研究會）	（研究社）	（日本語教育振興會）	（國語學研究會）	（東北帝國大學文科會）	（中國文學研究會）	（民間傳承の會）	（國民精神文化研究所）	（京都帝國大學國文學會）	（土佐史談會）	（國民評論社）	（長崎史談會）	（山口高商々學會）

「文學研究」發行年月一覽表

第一輯	昭和七年三月	第十八輯	昭和十一年十二月
第二輯	昭和七年十月	第十九輯	昭和十二年五月
第三輯	昭和八年二月	第二十輯	昭和十二年十月
第四輯	昭和八年三月	第二十一輯	昭和十二年十一月
第五輯	昭和八年七月	第二十二輯	昭和十三年三月
第六輯	昭和八年十月	第二十三輯	昭和十三年十月
第七輯	昭和九年一月	第二十四輯	昭和十三年十二月
第八輯	昭和九年五月	第二十五輯	昭和十四年六月
第九輯	昭和九年十月	第二十六輯	昭和十四年十二月
第十輯	昭和九年十二月	第二十七輯	昭和十五年七月
第十一輯	昭和十年四月	第二十八輯	昭和十六年三月
第十二輯	昭和十年七月	第二十九輯	昭和十六年八月
第十三輯	昭和十年十月	第三十輯	昭和十六年十二月
第十四輯	昭和十年十二月	第三十一輯	昭和十七年六月
第十五輯	昭和十一年四月	第三十二輯	昭和十七年十二月
第十六輯	昭和十一年七月	第三十三輯	昭和十八年二月
第十七輯	昭和十一年十月		